優　秀　―第一部門―

薬を二十五錠飲みながら

大阪府
北村庄子

私は精神障害者だ。一日薬を二十五錠飲んでいる。

十七歳のとき発病して以来、二十一年間精神科に通い十六回入退院を繰り返した。でも阪神大震災の年、知り合いの紹介で、夫、悟と出会った。

夫、悟は健常者で、私のことを個性的な女性と思ったそうだ。何回も会うたび、互いに好きになり、悟はプロポーズをしてくれた。

「俺の作業着を一生、洗ってくれ」。

そうこうしているうちに、結婚式も六月二日に決まり、私は病気の事を話した。
「そんなこころの病なんか、俺が治したる」。
私は子供など産めない体だった。睡眠薬と精神安定剤を服用していたからだ。だがしかしまさか妊娠するなんて!!
主治医の北川先生は
「君は薬を飲んでるのに、子どもをつくったんか!」
と、だいけんまく。
「まあ薬を調節しようか」。

妊娠がわかった。産科クリニックの先生は、
「さわ病院の患者さんはお断りします。精神科のある総合病院にいかれたら?」
と、冷たい返事。
北川先生の紹介で北野病院で出産することになった。北野病院の産科の先生は快く受け入れてくれた。
入籍をすませ、結婚式を挙げ幸せだった。その頃は妊娠三か月、薬も三錠。つわりもひどく、母子手帳をもらいに行った時、統合失調症と保健センターに言うと保健婦の森川さんが月一回訪問してく

れた。
悟はドライブが好きで色々な所に連れて行ってくれた。信州や琵琶湖、安産の中山寺まで腹帯をもらいに行った。
クリスマスが過ぎ、おせちを作りお正月を迎えた頃、おしるしが出た。
すぐ北野病院に電話し、母と一緒にタクシーで行くと即入院！　悟は仕事。
丸三日間、陣痛で眠れなかった。その時私は、三十三歳の誕生日を迎えた。
松田聖子が離婚したニュースを聞いた夕方、私は二、三一八グラムの女の子を出産した。

助産婦の笹森さんが身体を熱いタオルで拭いてくれた。それが天国にいる位気持よかった。
亜耶と名づけた赤ちゃんは未熟児で、先生に保育器の中に入れなくてはならないと言われた。他のママ達は、おむつを替えたり、お乳をあげたり、私は薬のせいで亜耶が眠ってしまうと言われ母乳をあげられなかった。
一週間たって、亜耶を小児科に残して私は退院した。小児科の看護婦さんは
「亜耶ちゃんはおしゃぶりも上手でかしこいですよ。お母さん面会に来てね」
と、言ってくれた。本当にお人形のように小さくて、初めて悟と会いに行ったときしゃっくりをしていて、あばらが折れないかなと心配してしまった。

だが、日がたつごとに私は眠れなくなり、電話が鳴るたび亜耶が死んだのではという妄想に変わっていった。年老いた母は「寒い寒い」と言いストーブにあたるだけで家事もしてくれなかった。

気が付いたら、緑色の部屋にいた。さわ病院の保護室である。

鍵が掛かっていて、この扉は永遠に開くことがないような気がした。仕方がないから眠った。白いドームの中で、

「亜耶ちゃんー！　悟君ー！」

と、叫んでこだまのように響く夢を見た。

亜耶は北野病院を退院しなくてはならなくなった。さわ病院の北川先生は乳児院を探してくれ、亜耶はすみれ乳児院に行くことになった。

悟は毎晩、仕事が終わるとさわ病院に来てくれた。亜耶の写真を持ってきてくれた。アンパンマンのようにふにゃとしていた。その頃は、私も開放病棟に移れるくらいに元気になっていた。妊娠中、北川先生は、

「もし出産後、調子悪くなったら僕が治してあげるから」

と、暗示にかけるような事を言ったから、その通りになってしまったからかな?と今思えば…。

五月末、やっと退院できた。悟が迎えに来てくれた。その足ですみれ乳児院に行った。初めて亜耶を抱いた。私に似て大きくて澄んだ瞳(ひとみ)で私を見つめ微笑(ほほえ)んだように見えた。

それから週三回、すみれ乳児院に通う生活が始まった。日曜日は夫婦で面会に行った。亜耶は「この二人は私にとって大事な二人だ」と、幼いながら理解していたようだ。

「亜耶ちゃーん！　パパとママよ」。

はいはいから、手をもってよいよいと歩くようになってきた。ところで、亜耶が初めて話した言葉は、「あーや」だった。土日は外泊をするようになってきた。つい、外泊用にベビー服を買ってしまう。

「亜耶ちゃん、お母さんが可愛(かわい)い服持ってきてくれたよ」。

着替えをして車で家に向かった。鶴見緑地にベビーカーで行き写真を撮ったりひと時の楽しい週末を過ごした。

二歳になった頃(ころ)、念願の保育所の通所の通知がきた。亜耶は保育所に通えることになった。

通所理由は、母が障害者で育児が出来ないということで、さわ病院の診断書にも「精神分裂症」（現在は統合失調症）と書かれた。はっきり言って、私にもどんな病気かよくわからない。

すみれ乳児院を卒院する日がやってきた。

「私はずーっとこの日を待ってたんや」
と、亜耶を思わず抱きしめて泣いた。
これから一緒やね。でもいざ何をしてあげたら良いのかわからず、悟は、
「自分の娘にそんなに緊張せんでいいで」
と、励ましてくれた。
四月五日、入所式。自転車にはまだ亜耶を乗せて走れないから、ベビーカーに乗せてお唄を歌いながら十五分位かけて行った。
亜耶は、たんぽぽ組さん。黄色い帽子に水色の遊び着。先生たちの劇もあって楽しく終わった。
鶴見保健センターの保健婦の森川さんが保育所に行ってくれた。
「庄子さんは、精神障害者で、時々しんどくなる時もあるけど、亜耶ちゃんの為一生懸命頑張ってるから何かあったら森川のほうに連絡ください」。
鶴見区は福祉に特に気を遣ってくれているようだ。森川さんの紹介で、保健センターのグループワークとみどり作業所に行く事になった。
大阪市みどり作業所は、普通の民家で二階建て。指導員の南野さんは、音楽の専門学校の福祉音楽科というところを卒業したという。

その頃、みどり作業所では、マドレーヌを焼いて、鶴見区役所の地下の食堂前で一個百円で売るという取り組みが始まっていた。私は若い頃ハウスマヌカンをしていたことがあり、販売部長に任命された。一日二万円位、最初は飛ぶように売れた。保育所に亜耶を預けて一年位通ったんかな。

クリスマス、老人会のイベントで、みどり作業所は鶴見区民ホールのステージに上がった。南野さんの指導で、クリスマスソングと上を向いて歩こうの練習に励んだ。

私はカズーという、笛のような楽器と、ピアニカと歌を担当した。

「ワンツースリーはい」

南野さんの合図でイントロのカズーを吹いた。ソロのピアニカもうまくいった。あっという間、あがる事もなくステージは終わった。最後に南野さんのあいさつ。

「大阪市みどり作業所です。こころの病を持った人たちが集まって活動しています。池田の殺傷事件から、精神障害者には偏見があると思いますが、理解してくだされば嬉しいです」。

その頃、悟が十三年も働いてきた鉄工所を突然、辞めたいと言い出した。無理して買った三十五年ローンの三階建てのマイホームもあるというのに。でも朝八時から夜九時頃まで働いて、土色の顔色で帰ってくる悟を見ると「いいよ」と言ってしまった。

失業保険をもらいながら、慣れないネクタイ姿で就職活動を始めた。面接に行っても、四十一歳と

いう年齢ではなかなか採用までいかない。悟は致命的に字が汚いという短所があった。面接で、パソコンが出来るかとよく聞かれ、職安の人にもパソコンの初級の訓練校に通っては、と勧められた。

ヘソクリでパソコンも買った。みどり作業所の友達がセットしてくれた。私もワードを教えてもらい、今、こうして打っている。

ある日南野さんが、

「ピアカウンセリングってあんねんで」

と、言った。

「何それ?」

「うん。つまり障害者同士、お互いの悩みの相談しあうことかな」。

詳しいことを南野さんから聞いて、平野区のピア大阪という所でピアカン講座をやるということがわかった。

さっそく申し込んで、三歳半になった亜耶をつれ、ピア大阪に行ってみた。

パパイヤ鈴木に似ている平下さんという男性が会ってくれた。だが平下さんは車椅子(いす)だった。

「はじめまして。北村庄子です。三十六歳、主婦です。娘の亜耶です」

「こちらこそ。よく電話でお話しましたけど平下です。パパイヤ鈴木と言わないでください」。

笑いながら講座に参加するということになった。亜耶は、車椅子というものを間近で見て、カルチャーショックを受けたようだ。

「車椅子の人には親切にしなあかんねんな」。

亜耶もおぼろげに、母は保育所のお友達のお母さんとちょっと違うということがわかってきたようだ。このまま、障害をもった人とか色んな人権について理解していってくれたら、優しい女の子になるだろう。

さてピアカン講座が始まった。二泊三日、長居のユースホステルに泊まった。だが精神の障害者は私だけで、車椅子の人たちや全盲の人までいた。まず自己紹介。

「北村ちゃんと呼んでください。十七歳から精神科に十六回入退院を繰りかえし、薬を飲みながら販売の仕事をしたり、結婚して三歳半の娘がいます」。

それぞれ自己紹介をしていった。まっさんという車椅子の女性と、ちむりんさんというフミヤ君に似た車椅子の男性がリーダーだ。

セッションで色んな自分の事について話した。人の良いところを誉めていくとかは、

「北村ちゃんは、GAPにそのパンツ、独特の個性。おもろいし、やせてたら若い頃きれいやったろうな。でも今はとても三十六歳には見えへんで。若く見える」

なんて、誉(ほ)められ気分がよかった。鶴見保健センターのＳＳＴ（ソーシャルスキルトレーニング）というのがあって、社会生活技能訓練という。その延長に似ていた。でも精神の障害者は私だけで、まず統合失調症の説明が難しかった。

妄想と現実の境目がわからなくなる時があり、幻聴もあり不眠が主な症状やと言ってみた。でも精神安定剤と睡眠薬の薬で、調節したら日常生活が送れる。平下さんが

「肢体障害者に車椅子(いす)が必要なように、精神障害者には薬が必要だ」

と、教えてくれた。でも池田の殺傷事件のことで偏見をもたれてるなと思った。自分は死のうと思っても、あんな風に子供を殺そうなんて思ったことは一度もない。あの事件はどうなるのだろう。

ボランティアの人たちもいっぱい来ててあっという間の三日間だった。

朗報！昨年の九月、主人がやっと就職出来た。フォークリフトの免許を取得した悟は、フォークリフト作業員として雇われたのだ。

クリスマスケーキを食べ、二〇〇二年お正月を迎え一月十日、私は三十八歳、亜耶は五歳になった。ケーキを亜耶と作って幸せを感じた。（あーこのまま幸せが続けばいいのに）

でも亜耶に時々言ってしまう。

「かあちゃんが遠くに行ってもええか？」

「あかん」

亜耶は答える。遠くに行く。入院することだ。まだ五歳だというのに、私が健常者と違うことが、いずれわかってしまい嫌われるのが怖い。私が老人ホームにいる、年老いた母を嫌うように…。そうならない為にもどうしたらいいかわからないけど、亜耶に精一杯、愛情をそそごう。

ゴールデンウィークの頃、悟はある生命保険のパンフレットを持って帰ってきた。

「これどう思う？　ええやろ？」

今までの生命保険は、死亡保障が三千万ついてたけど保険料三万五千円も払って、その上亜耶の学資保険を一万位払っていた。職場で片山さんという女性が話しかけてきたという。

「嫁はんに聞いてみて」

と、夫は片山さんに言ったらしい。さっそく電話がかかってきた。はきはきとした女性だった。家族三人で三万ちょっとで三千二百万の保障があるという。

「契約してみよか？」

五月末の日曜日、片山さんが家にやってきた。温和そうなハキハキ元気のいい人だ。

六月一日付けで契約することになった。翌日、七年目の結婚記念日。

ある日、片山さんが、

「お茶会があってケーキが食べられるねんけど、気晴らしにこない？」
と、電話があった。タダでケーキが食べれて片山さんに好感を持っていた私はＯＫした。
だがそれは、みどりスクールのお誘いだったのだ。勉強して試験で九十点以上取って、生命保険募集人になるという、いわゆる保険の外交員ということだ。
結局、なんやかんやで、みどりスクールに通うことになった。お弁当もあり、日給三千円もくれる。お昼のあとの眠気と戦った結果、私は百点満点を試験で取り合格。
だが、私はある失敗をしてしまった。
健康診断書に、自律神経失調症と書いてしまったのだ。まさか精神のことなんて書けないけれど、病気の事は少し位かいておこうと軽い気持だった。
教育部長の呼び出しがかかり、どこの病院で何という先生で何という薬をどれくらい飲んでいるのかと、プライベートなことをズケズケと聞かれ、泣いてしまった。もう無理だと思った。
何の為の百点？と思っていたら、教育部長がやってきて、
「さわ病院の先生に、営業という仕事が就労可という診断書をもらってきなさい。そしたらＯＫです」
と、優しくいってくれた。
さっそく診断書を書いてもらい教育部長のＯＫを出してもらった。

さあ、八月一日は入社式。

薬を二十五錠飲みながらでも、結婚して、出産して、育児をして、ましてや、仕事もできるのだから…。

北村庄子

昭和三十九年一月十日生まれ　生命保険外交員

大阪府大阪市在住

選評

この方の話に私は深く感動しました。障害といっても、さまざまな障害がありますが、最も辛いのは精神の障害ではないかと私は思っています。しかし、北村さんは頭脳明晰で御自分の状況を実に客観的に見る目を持っておられ、信じられないほど、明るい積極的な生き方をしておられます。おつれあいとお子さんの愛情深い御家族の存在が大きな力になっていると思いますが、北村さんはそのことをよく理解しておられます。お幸せな人生を祈ります。

（羽田　澄子）